

前期：キリスト教思想と宗教哲学

オリエンテーション——宗教哲学とその基本問題

1. 宗教哲学の歴史と伝統 2. 理性と啓示 3. 悪と神義論 (4. 予定と自由意志)
5. 形而上学と神
6. シュライアマハー 7. トレルチ
8. 波多野精一
9. ブーバー 6/12
10. ティリッヒ 6/19
11. リクール 6/26
12. 研究発表 1 7/3
13. 研究発表 2 7/10
14. 研究発表 3 7/17
15. 研究発表 4 7/24

<前回>トレルチ (Ernst Troeltsch,1865-1923)**(1) リッチェル学派からの離脱**

1. リッチェル批判

・基本的課題「近代世界をいっそう率直に検討することによってキリスト教的理念世界を徹底的に思惟し、明確に系統的に述べること」

「キリスト教的理念と近代世界との関係が倫理的次元の問題に深く根ざしていることを見いだした」(森田、219)

「実践としての倫理的領域のなかでも、とりわけ社会倫理の領域において、トレルチは教義的伝承と近代世界との対立葛藤が現われることを看取する」、「社会集団の宗教的実践として理解され答えられるべきである」(220)

3. 『社会教説』(Die Soziallehren der christliche Kirchen und Gruppen, 1912)

- ・社会教説：国家、経済、家族、社会などをめぐる諸教説
- ・キリスト教共同体の類型(理念型)：教会(Kirche)、分派(Sekte)、神秘主義(Mystik)

4. 「キリスト教の本質」とはいかなる問題か。

cf. ハルナック(『キリスト教の本質』)とその『教理史』

原始キリスト教とその変質(ヘレニズム化)

『<キリスト教の本質>とは何か』(1903)。歴史的複合現象(Komplexerscheinung)としてのキリスト教→全体の総括的展望+個別的な事象の厳密な把握

批判としての本質、発展としての本質、理想としての本質。

5. 近代プロテスタンティズムの二段階説(リッチェル学派との相違)

古プロテスタンティズム(Altprotestantismus)

新プロテスタンティズム(Neuprotestantismus)

(2) 宗教史学派の神学

6. 近代以降の神学の方法論的反省。シュライアマハー(Dogmatik から Glaubenslehre へ)からリッチェルへ至る展開過程の線上。

「神学における教義学的方法と歴史学的方法について」(Über historische und dogmatische Methode in der Theologie, 1900)

7. 歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義

- ・批判(Kritik) ・類推(Analogie) ・相互作用(Wechselwirkung)あるいは相関(Korrelation)

→ 方法論的現在中心主義

8. 「宗教史学派の教義学」(Die Dogmatik der "religionsgeschichtliche Schule", 1913)
伝統的な教義学の解体、『信仰論』

(3) カント的な宗教哲学の構想

9. 心理学と認識論 → カントの批判哲学による解決
経験から経験のア・プリオリな条件へ、実証主義的宗教心理学への批判
10. カント主義の拡張 cf. 波多野
認識論のみがアプリオリではない。精神活動の諸領域のアプリオリな構造。
宗教的アプリオリ、この宗教的アプリオリが現実化する(心的現象)
↓ cf. ユングの元型(林道義)

11. トレルチの体系構想と宗教研究の位置：4つの学的テーマ
- ・宗教現象の心理学的認識を可能にする普遍概念・類概念(宗教心理学)
 - ・宗教の真理内容(宗教認識論)、事実に対する価値、宗教的アプリオリ
 - ・歴史上の諸宗教の段階的な評価、宗教の理想への適用、歴史を貫いて遂行される真理内容の内的運動(宗教の歴史哲学)
 - ・生全体の中での意味、最も普遍的で原理的な世界知と宗教の主張する実在(神)との関係(宗教の形而上学)。ライプニッツ的。

(4) 歴史主義の諸問題

12. 歴史主義と歴史相対主義
13. キリスト教の絶対性(普遍史)からヨーロッパ的文化総合へ
- ・1902: Die Absolutheit des Christentums und die Religionsgeschichte
「救済宗教」「キリスト教は人格主義的な宗教性の最も強力で集中的な啓示」(199)
↓
 - ・1922: Der Historismus und Seine Probleme、「ヨーロッパ主義」(Der Europasimus)

Q:

- 1) 歴史相対主義はニヒリズムか? cf. H.R. ニーバー(『啓示の意味』)、パネンベルク
- 2) 普遍性とは何か? 普遍性と個別性とは単純に対立的か? 歴史内部で可能な普遍性は?

8. 波多野精一

1. 『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局)より

波多野精一(1877.7.21 ~ 1950.1.17、明治10 ~ 昭和25)

宗教哲学者、長野県(松本町)に生まれる。第1高等学校から東京帝国大学文科大学哲学科へ、大学院でR.ケーベルに学ぶ。1900年、東京専門学校(現在の早稲田大学)講師となり、西洋哲学史を講義。04年より、ベルリン、ハイデルベルク大学に学び、ハルナック、ヴィンデルバンドらに師事。帰国後、東京帝国大学で原始キリスト教を講義。1917年京都帝国大学教授となり宗教学講座を担当。47年に玉川学園大学教授に招聘。

『宗教哲学』(1935)、『宗教哲学序論』(1940)、『時と永遠』(1943)

2. 『京都大学百年史/部局史編1』第2章より

波多野精一(1877 ~ 1950)が大正6(1917)年12月に宗教学講座に着任キリスト教の学術的研究のため寄付された渡辺荘奨学資金により、大正11(1922)年5月本講座が宗教学第2講座として設置され、波多野がこの講座を兼担することになった。波多野は、原

始キリスト教、パウロおよびヨハネの宗教思想、宗教思想史等について講じ、退官後発表された『時と永遠』(1943 年)のような、キリスト教の立場に基づく宗教哲学をも構想しつつあった。波多野の厳密なテキスト読解と深い宗教哲学的思索とが、本講座の礎石を据えたといつてよい。

波多野は、昭和 2 (1927) 年、本講座の兼担を解かれて分担となったが、昭和 12 (1937) 年 3 月には宗教学第 1 講座から本講座の担任者となり (第 1 講座を分担)、本講座は初めて専任教授を持つことになった。しかし同年 7 月に波多野は停年退官し、昭和 23 (1948) 年まで講座担任者のいない状態が続くことになった。

3. 宮本武之助『波多野精一』日本基督教団出版部。

生涯と思想的発展、波多野宗教哲学の立場と方法、生の三段階、宗教の本質と類型、人格主義の宗教

4. 宗教哲学形成過程

『西洋哲学史要』(1901)

『基督教の起源』(1908)

「スピノザ研究」(大学院卒業論文、1910)

「カントの宗教哲学について」(1913)

「歴史の意義に関して——ギリシア思想とヘブライ思想と」(1922)

西洋思想研究 (哲学+キリスト教思想) に基づく宗教哲学構築

哲学史研究者 (古代ギリシャ哲学と近代哲学、特に観念論的系譜)

キリスト教思想研究者 (聖書学、宗教改革、神秘主義)

現代宗教学 (経験)、宗教研究の哲学的方法論的な反省

↓

宗教哲学

宗教を人間の生の営みにどのように位置付け、理性的な理解にもたらすか (哲学)

具体的な宗教経験に即した・それを正当に扱いうること (宗教的基盤・体験)

5. 波多野精一『波多野精一全集』全六巻、岩波書店、1969年。

『時と永遠 他八篇』『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、2012年。

(1) 生涯

幼年・修学時代 (1877 ~ 1899 年)

早稲田大学時代 (1900 ~ 1916 六年)

京都帝国大学時代 (1917 ~ 1937 年)

退官後から晩年期 (1938 ~ 1950 年)

6. 石原謙：「彼は平生自己について多く語ることを欲しなかったし、その書き残したもののなかにも自伝的な文章は殆ど見当らない。従つてわれわれの叙述も必要な限りに留めるのが妥当であらうし、また其以上に語ることは困難である」。(石原謙「序説 生涯と学業」、石原謙・田中美知太郎・片山正直・松村克己『宗教の哲学の根本にあるもの——波多野精一博士の学業について』岩波書店、1954 年、6 頁)

7. 早稲田大学時代：東京帝国大学大学院でケーベルの薫陶を受けつつ、卒業論文『スピノザ研究』の完成 (1904 年) に向けて研究に集中する一方、東京専門学校 (早稲田大学の前身) の講師。

・『西洋哲学史要』(1901 年、24 歳)

・1905 年からドイツ留学。ベルリンとハイデルベルクの両大学で、哲学、キリスト教

神学と聖書学 → 東京帝国大学での「原始キリスト教」の講義(1907)
『基督教の起源』(1908年、31歳)

1917年夏の大隈重信侯銅像建設問題に端を発した騒動を期に大学教授を辞する。

8. 京都帝国大学時代：京都に転居し。哲学講座に移った西田幾多郎の後を受けて宗教学講座を担当し、一九三六年まで宗教学講座において研究と教育（在職最後の年は、基督教学講座（宗教学第二講座）を担当し宗教学講座は分担）。

- ・三木清や田中美知太郎
- ・テキスト原典の厳密な読解に基づく思想研究というスタイルを確立。
- ・波多野宗教哲学三部作。『宗教哲学』(1935年)

9. 退官後：同志社大学と関西学院大学で講義。

『宗教哲学序論』(1941年)を出版、1941年戦争の危機が高まる中で東京への転居。日本神学校で臨時講義を行う以外は著述に専念。『時と永遠』を一九四三年に刊行。岩手県千厩町に疎開し、そこで敗戦。

戦後、玉川学園へ。

10. 波多野自身の宗教的体験の詳細については、知ることができない。

波多野は東京帝国大学卒業の前後から、一番町基督教会（後の富士見町教会）に出入りし、牧師植村正久から洗礼を受け（一九〇二年頃）、そして生涯キリスト者として生きた。

「波多野宗教哲学の根底にある信仰は確かに正久から受継いだものであり、その信仰を弁証論的に宗教哲学的に展開しようとしたという点においては、『真理一斑』を継承するものだったと言ってもよいであろう」（雨宮栄一『若き植村正久』新教出版社、2007年、327頁）。

「学者としての使命を果たすために、自分の努力を学問的研究以外のものに向けなかった」（宮本武之助『波多野精一』日本基督教団出版部、1965年、36頁）

（2）波多野宗教哲学の形成過程

11. 波多野宗教哲学自体の形成過程：40歳で京都帝国大学に教授として着任してからの20年間。

- ・宗教哲学の土台は、早稲田時代にはほぼ確立。『西洋哲学史要』『基督教の起源』。哲学史におけるカントの批判哲学と、イエスあるいはパウロの宗教的体験との意義が明確に意識されていたこと、そして思想史が哲学と宗教とを包括するものとして理解されていた。
- ・宗教哲学体系の形成：
 - 第1期（宗教哲学形成の胎動期）1917年の京都赴任から1926年（大正末）頃まで。
1920年の「宗教哲学の本質及其根本問題」の前後で時期を区切る。
 - 第2期（研究の緒が見出され体系の原理が築かれた）
 - 第3期（完成期）1935年から43年

12. 波多野の宗教哲学構想を導く2つの問い：

- 1) 近代以降の思想状況において従来の宗教哲学を乗り越える宗教哲学の哲学的基礎はどこに求められるのか。宗教「哲学」。
- 2) 宗教自体の要求に適切に応答する宗教哲学とは何かという問い。「宗教」哲学。

↓

1) に対する結論：「正しい宗教哲学」はカントの批判哲学の上に構築される。第一期の前半には到達されていた。

13. 第二期：沈黙の 10 年＝苦闘の時代。基督教学講座を独立した講座として確立するために波多野が苦闘した時期。
- ・ 1920 年代以降の哲学や神学の新しい動向が生みだした困難。
 - ・ 2) の問い。

(3) 近代の知的状況と宗教哲学

14. 「誤れる宗教哲学」→「正しき宗教哲学」

・ 思想世界が啓蒙主義の決定的な影響下にあった近代という時代にあつて、宗教を積極的に論じること。

・ 実証主義的の理念にしたがった宗教学（＝現代宗教学）：宗教心理学

カントの実証主義、フオイエルバッハ

事実に基づいて確実な知を追求するという実証主義の態度自体は、宗教研究においても妥当するもの。しかし、事実性の尊重は、実証主義者がしばしば素朴に前提するような仕方では宗教あるいは宗教哲学の廃棄を帰結しない。

15. 自然主義に陥った実証主義的宗教研究：「必然的帰結として宗教の否定に導く」、「宗教の事実を曲解しその真相を歪曲する」（『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、16 頁）

実証主義は認識論的相対主義を帰結することによって、宗教的体験が志向する体験の実在性（志向対象の絶対的実在性・神聖性）の意味を正当に扱うことができない。

↓

・ 「事実性」の問い直し。事実は意味あるいは理解と関連することによってはじめて、知の対象となる。いわゆる「生の事実」といったものは人間の経験においては存在しない。

↓

経験的な事実に基づく宗教と、その反省的自己理解としての宗教哲学は、実証主義的な方法論に基づく宗教研究（たとえば、宗教心理学）においても、その意味を失うことはない。

16. 『宗教哲学序論』で「誤れる宗教哲学」と呼ばれる合理主義的宗教哲学の立場。

神を直接の理論的な認識対象とする哲学、その意味で、「神の学」。それは、アリストテレス以来「神学」と呼ばれ、キリスト教の神論においても採用された立場、その典型として挙げられるのが、神の存在論証を含む自然神学（アンセルムスとトマス・アクィナス）。

↓

カントによる神の存在論証批判により、伝統的な自然神学は近代以降の知的状況においてその妥当性を失った。

神の存在論証は論証ではなく人間における宗教的問いの表現である。ティリッヒ。

17. 正しき宗教哲学：神自体を理論論証の対象とする哲学ではなく、人間の事柄としての宗教、人間的生における宗教の可能性と現実性を論じる哲学。

18. 超自然主義の神論：合理主義的宗教理論の対極にあると考えられるも、いわば広義の合理主義として、誤れる宗教哲学に分類される。超自然主義は、「合理主義とは対立の関係に立ち全く異なる傾向を示しながら、宗教の対象を直接に理論的認識の対象とする点においては共通なる哲学的意義」（同書、47 頁）。一つの学として可能になるためには、合理主義と結合することが必要。この超自然主義と合理主義との模範的な結合としてあげられるのが、トマス・アクィナスの神学。

19. 『宗教哲学序論』の「正しき宗教哲学」とそれに基づく『宗教哲学』の体系的叙述。

「宗教的体験の理論的回顧その反省的自己理解」＝批判哲学＋実在論

20. カントの批判哲学にこそ宗教哲学が辿るべき「正しい道」が見出される。

・「宗教哲学の本質及其根本問題」(1920)

カントは、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、その理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究する」(『時と永遠 他八篇』岩波文庫、279頁)という批判主義の根本精神を、まず認識論において確立し、「次第に道德や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった」。

↓

カントはこの新しい宗教哲学を徹底した仕方で遂行したわけではない。

波多野宗教哲学＝カント批判哲学の宗教哲学における徹底化(ヴィンデルバント「カントを理解することは彼を超越すること」)

・「批判主義の宗教哲学は、主理主義の形而上学や超自然主義のそれと異って、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」(『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、二八〇頁)。

人間の営みとしての宗教を対象とする宗教哲学構想は宗教哲学の人間学化あるいは人間学的転回(パネンベルク)

W. Pannenberg, *Theologie und Philosophie. Ihre Verhältnis im Lichte ihrer gemeinsamen Geschichte*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996, S.184-195.

・カント主義の形式的理想主義と反主知主義。

人間の精神的諸活動についてその「事実問題ではなく権利問題」を問うということ、つまり、「その理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究する」と先に述べた批判主義の精神。

カント主義が理論理性を超えて「普遍妥当なる価値」を認めうるすべての領域を含むこと。「理性とはあらゆる種類の普遍妥当的価値の全体の謂い」(同書、282頁)だからである。理論理性に理性を限定する主知主義(合理主義)に対して、宗教にも理性を根底にもった固有の価値を認めることが、正しき宗教哲学を可能にする哲学的根拠。

21. シュライアマハーの「高次の実在論」にしたがい、宗教的実在論に立った宗教哲学の構築を試みる。→解釈学

・神ではなく宗教、つまり宗教的体験が宗教哲学の対象。

・宗教的体験＝宗教哲学が前提とすべき事実。この事実を人間存在における意味との関わりにおいて解釈する。

・歴史的他者の体験はそれが表現され伝承されることを通して研究者にもたらされるのであって、その事実には解釈が不可分に伴っている。歴史は出来事であるとともにその物語だから。

他者の体験と研究者自身の体験との関連づけ。

↓

事実としての宗教的体験は、研究者自身の体験との関わりで理解されねばならず、ここで解釈という営みが前提となる。

・波多野宗教哲学の対象とする事実が意味を内包する事実であることから、宗教的体験の「理論的回顧その反省的自己理解」という解釈学的作業が帰結する。

22. 思想史研究を土台とした宗教哲学。『宗教哲学序論』「第四章 歴史的瞥見」。

ルターとカントに決定的な位置を与えている。カントの批判哲学とルターの宗教的体験、

この二つは、「宗教的体験の理論的回顧その反省的自己理解」と定式化された宗教哲学の思想史的根拠というべきである。

(4) 波多野宗教哲学の構成・内容

23. 『宗教哲学序論』「第三章 正しき宗教哲学」(同書、84-108 頁)。

宗教哲学体系の本論と各論：宗教本質論、類型論、人間学

24. 宗教本質論＝波多野宗教哲学体系の中心：「宗教哲学の問題は簡単にいえば本質論に尽きる」(同書、95 頁)。

「すでに論じた如く宗教の学的研究は事実の内面的意味を前提にせねばならぬ。この内面的意味は体験において与えられまた知られる。合理主義の宗教哲学と異なって正しき宗教哲学は宗教的体験の反省的自己理解、その理論的回顧として成立つ。体験の立場に立つものは宗教が他と混同を許さぬ固有の意味内容を有するを知る。かかる意味内容を反省に上せ、その理論的理解を原理へと推進めて行くものは本質の観照把握に到達してはじめて満足を見る。この本質的理解こそ宗教哲学である。」(同書、84 頁)

宗教的体験→ 理論的回顧→反省的自己理解→「本質の観照把握」

現象学の本質直観に相当する作業。

25. 歴史的な個別的な現象(体験とその表現)から類型を経て本質に至る過程の中に、この本質直観は位置づけられる。波多野宗教哲学は現象学的である。

26. 宗教の本質理解の内容：

『宗教哲学』の第一章の冒頭において、シュライアマハーの「高次の実在主義」と関連づけつつ、「宗教において自我は現実世界を超えて遙かに高き実在との関係に入る」(同書、171 頁)。つまり、高次の実在との関係・交わりこそが宗教の核心を構成するものであり、波多野は、この実在を愛の関わりにおいて人格として出会う他者、神聖性を有する絶対的他人として説明してゆく。

27. 宗教類型論：本質直観がなされるべき直観の素材(典型的事例)を与える。

28. 哲学的人間学：絶対的他人の意味を明らかにするには、人間的生のあり方を他者関係において解明する。

「更に立ち入っていかなる具体的論究が行われるかを考察すれば本質論と関連しつつまたそのうちに包含されつつ、ここに比較的独立なる研究の部門を構成する諸問題がおのずから別れ出るのを見る。類型論的と人間学的との二つの研究が即ちそれである」(同書、95)。

29. 宗教的類型論：新カント学派(ヴィンデルバントやリッケルト)の類型論やウェーバーの社会学的類型論。

類型は、個性と普遍、あるいは個体と本質との中間に位置し、媒介的意義を有している。一方で、類型は個性に対しては普遍の側に立つが(「類型は事実の比較によって得られる抽象的産物」、他方同時に「飽くまでも個性を指ざし個性の香りを留める」)。

類型：歴史的事実から類型を介して本質へという上昇的思惟と、本質が類型を介して歴史の世界に具体的形態において反映するという下降的思惟との双方の思惟の運動が交差する場。

30. 人間学：カントやシュライアマハーの古典的な議論が存在することはもちろんであるが、より直接的には、シェラー、ハイデッガー、そしてブーバーの哲学的人間学が意識されている。

↓

(5) 『時と永遠』の地平

自然的生、文化的生。人格・愛・宗教
時間 永遠

(6) 波多野宗教哲学の現代的意義

象徴論・宗教的象徴

<参考文献>

1. 石原謙編『哲学及び宗教と其歴史——波多野精一先生献呈論文集』岩波書店、1938年。
2. 石原謙・田中美知太郎・片山正直・松村克己
『宗教と哲学の根本にあるもの——波多野精一博士の学業について』岩波書店、1954年。
3. 『追憶の波多野精一先生』玉川大学出版部、1970年。
4. 京都哲学会『哲学研究』第406号（波多野精一博士追悼号）。
5. 浜田与助『波多野宗教哲学』玉川大学出版部、1949年。
6. 宮本武之助『人と思想シリーズ 波多野精一』日本基督教団出版部、1965年。
『宮本武之助著作集 上下』新教出版社、1991/92年。
7. 側瀬登『時間と対話的原理——波多野精一とマルチン・ブーバー』晃洋書房、2000年。
8. 大林浩『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局、1981年。
9. 安藤恵崇「時と永遠への思索——波多野精一」、藤田正勝編『日本近代思想を学ぶ人のために』世界思想社、1997年、118-135頁。
10. 片柳栄一「時と永遠——波多野精一」、常俊宗三郎編『日本の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1998年、257-286頁。
11. 原口尚彰「日本新約聖書学史における波多野精一」、
『キリスト教史学』（キリスト教史学会）第60集、2006年、87-102頁。
12. 村松晋「波多野精一と敗戦」、『聖学院大学論叢』第19巻第1号、2006年、63-72頁。
「波多野精一の時代認識」、『聖学院大学論叢』第19巻第2号、2007年、140-146頁。
13. 佐藤啓介「愛ゆえに、我在り——田辺、波多野、マリオンと存在—愛—論」、
片柳栄一編『ディアロゴス——手探りの中の対話』晃洋書房、2007年、216-236頁。
・「波多野精一の存在—愛—論」、『日本の神学』（日本基督教学会）46、2007年、31-52頁。
・「神の言葉の器としての人間——波多野精一の象徴論の存在論的再解釈をめざして」、『聖学院大学論叢』第22巻第1号、2009年、181-189頁。
14. 鶴沼裕子「日本キリスト教史における「他者」理解をめぐる 波多野精一の場合」、
『聖学院大学総合研究所紀要』第41号、2007年、132-160頁。
15. 芦名定道「日本の宗教哲学とその諸問題—波多野、有賀、北森—」、『アジア・キリスト教・多元性』第9号、現代キリスト教思想研究会、2011年、89-111頁。
・「思想史研究の諸問題——近代日本のキリスト教思想研究から」、『アジア・キリスト教・多元性』第10号、現代キリスト教思想研究会、2012年、1-18頁。
・「宗教的実在と象徴——波多野とティリッヒ」、『近代/ポスト近代とキリスト教』現代キリスト教研究会、2012年、3-22頁。
・「波多野宗教哲学における死の問い」、『キリスト教教学研究史紀要』第1号、京都大学キリスト教教学研究室、2013年、1-17頁。